

第86回日本皮膚科学会東部支部学術大会 ランチョンセミナー11

The 86th Annual Meeting of the Eastern Division of JDA

日時

2022年8月28日(日) 12:00～13:00

会場

第6会場 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター
3F 中会議室302A

本セミナーはライブ配信も実施しております。

詳細は「第86回日本皮膚科学会東部支部学術大会ホームページ(<https://eastjda86.jp/>)」よりご確認ください。

爪白癬は治せる時代

- 皮膚科医として完全治癒を目指す -

座長

安部 正敏 先生 札幌皮膚科クリニック 院長

講演1

ホスラブコナゾールを用いた 爪白癬治療

～外用治療で難治な症例をネイリン®内服治療に切り変えてみて～

演者

井上 剛 先生 岩手医科大学医学部 皮膚科学講座 助教

講演2

爪白癬治療における 薬剤選択の重要性

～軽症例から内服治療を行うことで完全治癒を目指す～

演者

水芦 政人 先生 東北大学病院 皮膚科 副科長 講師



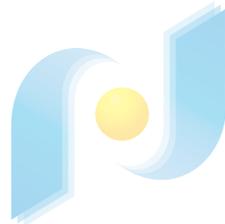
ホスラブコナゾールを用いた爪白癬治療

～外用治療で難治な症例をネイリン®内服治療に切り変えてみて～

岩手医科大学医学部 皮膚科学講座 助教 **井上 剛**

爪白癬は高齢化に伴い有病率が上昇する慢性、難治性の疾患である。本邦では10人に1人が罹患しているとされ、放置することで自身の爪変形に伴う転倒、ロコモ・フレイル、糖尿病性壊疽の原因となり、他者への感染源ともなる。爪白癬の治療として「日本皮膚科学会皮膚真菌症診療ガイドライン2019」で、経口抗真菌薬を推奨度A、外用抗真菌薬を推奨度Bとしており、治療の原則は経口抗真菌薬である。しかし、爪白癬の治療実態調査をみると爪白癬外用薬が経口抗真菌薬よりも多く使用されている現状にある。外用抗真菌薬で治療しても、比較的完全治癒率が低いことと、長期間の通院治療が必要となり患者の経済的負担が高くなってしまいうケースもある。

ホスラブコナゾールは日本で開発され2018年から爪白癬の治療に使用されている経口抗真菌薬である。経口投与後のバイオアベイラリティが高く、かつ薬物相互作用が比較的少ない。1日1カプセル(ラブコナゾールとして100mg)を1日1回服用という簡便な投与方法であり、内服期間が12週間と短いことから高齢者においても服薬アドヒアランスが保ちやすい。我々は長期間に亘り抗真菌剤外用治療がなされ、難治であった高齢(平均77.6歳)で平均爪甲混濁面積50%以上である爪白癬患者36名に対し、ホスラブコナゾール内服に切り替え良好な結果を得た。有用性と安全性を鑑み、高齢者であっても外用療法に固執せず、内服療法を積極的に勧めるべきと考えた。



爪白癬治療における薬剤選択の重要性

～軽症例から内服治療を行うことで完全治癒を目指す～

東北大学病院 皮膚科 副科長 講師 **水芦 政人**

今まで、KOH鏡検による浅在性白癬の診断は、私たち皮膚科医の特権であると考えていた皮膚科医が未だに多いのではないかと推測されるが、もうすでに、臨床検査技師でも浅在性白癬の検体採取から鏡検による診断の補助までが可能な時代になっている。爪白癬のタイプによって検体採取のポイントが異なることも臨床検査技師対象の講習会で指導しており、私たち皮膚科医も、あらためてしっかりと検体採取のポイントを理解、整理しておく必要がある。

また、爪白癬の主なタイプとして、DLSO, SWO, PSO, EO, TDO, Dermatophytomaがあるが、従来、抗真菌剤外用が主体のタイプはSWO, 軽症(～中等症)のDLSOおよびDermatophytoma(外科的処置の併用が必要)であり、抗真菌剤内服が必要なのは中等症～重症のDLSO, PSO, EO, TDO(意見が分かれる)であると言われてきた。一方で、日本皮膚科学会皮膚真菌症診療ガイドライン2019で、爪白癬の治療については、病型に関係なく、抗真菌剤内服が推奨度Aになった。やはりSWOは表在性のため外用治療が適していると思われる一方で、軽症～中等症のDLSOおよびDermatophytomaに関しては、ガイドラインに沿って、積極的に内服治療を行って完治を狙う時代が到来したと考えられる。